空駆る夜汽車　前

赫月　煌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空駆る夜汽車　前

【Ｎコード】
Ｎ２６０６Ｏ

【作者名】
赫月　煌

【あらすじ】
発達しすぎた都市・ハナマキ。
そこで瞬くものを見つけた俺は、いつの間にか夜汽車に揺られていた。

昔、金村が言っていた。

「夜汽車ってさ、流れ星みたいだよな」

近代都市・ハナマキ。

天をも貫かんと聳え立つ超高層ビル群に、厚い雲が覆う鉛色の空。蜘蛛の巣よりも細かく張り巡らされた線路。自然の植物などなく、道端には申し訳程度に人口植物が植えられている。

建物は無駄に極彩色で、それこそマゼンタ、シアン、イエローにはじまり、パープル、スカイブルー、イエローグリーン、ゴールド、ショッキングピンク、スカーレット…ｅｔｃ．　グレーやブラックなどの無彩色は一切ない、目に優しくない都市だ。

とはいえ、現在の大倭帝国で一番発達しているのはここハナマキと言われ、首都・トーキョーよりも人口密度が高くなっている。超高層ビル群は地上では飽き足らず、最近では地下にまで進出し始めている。そのうち、本当に地下帝国を見つけてしまいそうなほどの勢いで地球を抉っていた。

そんなハナマキでも、文明が発達していない時代があったという。建物は二階まで、週に三日は青空が拝め、セピア色でどこか懐かしさを感じさせる優しい町だったと聞く。それはいったい何百年前のことかと思うが、今から数十年前のことらしい。つまりハナマキは、ここ数年で急激に経済成長を遂げていたのだ。

キラリ、
と空が瞬いた。しかし俺はそれが流れ星ではないことを知っていた。それは夜汽車…超高層ビル群の隙間を縫うように走る線路を時速キロで駆け抜ける公共交通機関の一つだ。というかそもそも、この澱んだ空を流れた小さな光など目視できるはずもない。星は、天体館と呼ばれる特別な場所でなければ見れない。俺は小学校の社会科見学で一度行ったきりだった。

ハナマキは、夜になれば色とりどりのネオンで極彩色の都市をさらに彩る。ネオンは夕方雲が茜色に染まり始めると同時に点灯し、空が白みはじめると消灯する。わずかばかりの日の光で照らされ極彩都市に戻るのだ。

「はぁ…」

なんでこんなところに住んでいるのか、俺は過去の自分に説教したくなってきていた。

俺は所謂地方出身者で、いまや独立国家となってしまったエゾ出身だ。まだ俺がガキの頃に、不穏な気配を感じ取った親が俺を連れてさっさとエゾを出たのだ。当時はホッカイドウと呼ばれていて、雪国の別称もあったものだが。俺と両親はエゾを出てチバに住み着いた。エゾより開放的で、田舎だった。俺は歳を重ねるにつれ、都会に憧れるようになった。よくある話で恥ずかしいが、都会に出れば何かが変わると思っていたのだ。

最初はチバを出てすぐのトーキョーに行った。トーキョーは仕事も多かったし、土地だってあまり高くなかった。少なくとも、社会人一年生の年収で安アパートの一室で暮らせる程度には。それから、トーキョーの忙しなさにもみくちゃにされ、ナガノに引っ込んだ。山奥で静かに暮らしてみることにしたのだ。そこで髪も髭も伸ばしっぱなしの仙人のような生活を送ったが、すぐに飽きた。西はそのころから余所者の立ち入りを制限していたから、俺は東北に足をのばした。最初からハナマキに行ったわけではなく、フクシマに行っ

たのだ。だが、フクシマの気候が肌に合わず、懐かしさからか雪を求めて北上した結果、ハナマキでうまいこと職が得られたのでそこでそのまま暮らしている。

ふらふらしていた自分が悪いのだが、都会に出られたとはいえこんな体に優しくない街で俺は生きていけるのか、時々不安になる。

そんなある日、俺は、金村に出会った。

毎朝通勤で汽車が一緒で、よく見かける奴だと思っていたら仕事の取引先で、とはいえ俺も金村も平社員だからそのまま飲み友達になった。きけば、金村は親がハナマキの大学で教授をしていて、生まれたときからハナマキにいるのだとか。一度、金村の家に招かれて、小さな天体館のようなものを見せられた。小学校以来の俺は、あまり綺麗だと思えなかった。ナガノではなんとか星が見られたし、星なんか見えても見えなくても同じだと思っていたのだ。そのとき、金村がネオンの反射で色づいた夜空を見上げて、こう言ったのだ。

夜汽車ってさ、流れ星みたいだよな。

俺は本物の流れ星を見たことがなかったが、とりあえず頷いた。そのときはまだ、金村の言いたいことがわかっていなかったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2606o/

空駆る夜汽車　前

2010年10月11日21時50分発行